



英一蝶^上

南翠



特別
文庫14
A159
1





53-1704(A)

第百五号

英一蝶

序滿来

草稿紙三十三丁

東叡山花見の場
口普門院客殿の場
谷中宗眠室の場



英之條

序幕

東叡山花見の場

口普門院客殿の場

谷中宗眠富所の場

- 御中膳阿侍方	- 白須素江守
- 星嶽小山田氏市	- 星嶽星川助左衛門
- 繪沙多賀朝湖	- 彫物沙模み守蔵
- 御小姓 楓	- 御供当 梅浦
- 勇女中 山吹	- 勇女中 若菜
- 座頭 若菜の助	- 中納言 元助
- 植木屋の下女おきりて	- 御膳 宗念
- 植木屋人 三人	- 所の娘 二人

一 着巻 二人
一 茶巾所持 一人
一 山留 二人
一 所方の先幸舟
本座基上の方より左へ斜に下りて此門よりその後で冊子を
の端より左へはるは水生をよみ幕掛の神幕を以て此まに
より横に三枚座几を御を鑑をうけつあり結と末敷山並門院
のより左へ山留二人幕と持つて御花を掃りて居るは作
く幕掛
ト云ふ幕掛此をとも免
一山留甲 是で左に掃除と申すマア一ふく
一山留乙 何と紐やきり申すやア神の令りめッげ山人の
一山留甲 一年増と申す人今申すやア市中一作と正月の神
はるは花見の神より氣を掃りてとちりなること小神幕

ト云ふ幕掛

二行ノ

一山留乙 是より此節よりと祈り候はる者を出行く

花より花を戻りしや一山留甲 是より大座の呪たネ

一山留乙 祈り候はるは掃り候はる神ノサア

ト云ふ門内より細新坊と申す申す

一 控合 二人並び大儀とあり掃除の始らぬ申す

一山留 山留極の御座候の御座候の御座候

一山留 是れ御座候は此花見の御座候の御座候

一山留 是れ御座候は此花見の御座候の御座候

一山留 是れ御座候は此花見の御座候の御座候

一山留 是れ御座候は此花見の御座候の御座候

一山留 是れ御座候は此花見の御座候の御座候

一山留 是れ御座候は此花見の御座候の御座候

一山留 是れ御座候は此花見の御座候の御座候

御座候

の西まあ

一山乙 妻は年々大星とよしの思ふは儀もハ五ノ丸とよ

一山乙 標中あゝのり

一山乙 此方ハ江戸ノ慣をぬとらんそふな今ハあはれハ玉も

五ノ丸様と申すのハ将軍様ノ御意也阿伊の方と申すハ方ぢや只

今ハ大御姫様ノ御後様ゆゑ五ノ丸ハ殿ハ御生駒か定まつ

死ぶと云ふ事もあるハ威勢を此ノ上ノ直次殿ノ師ノ御方と

親意申すハ此様も申すハ此のちや

一山乙 此の邊を聞けハ難有い公方様ノ御意も

玉下ハ

一山乙 多賀洞洞此婦人修しハまかりて

一山乙 味平はうらたけの胡磨摺と字がをうら

一山乙 一山乙

一山乙 コレはツミを也今何とやら

一山乙 へイ、十二何とも申ません

一山乙 此様は

一山甲 此の先月御山ある

一山乙 下さう

一山乙 此の御意

一山乙 此の御意

一山乙 此の御意

一山乙 此の御意

一山甲 此の御意

一山乙 此の御意

此の御意

一 珍念 阿房は好いあつりの是を別け縁をさし生は此
久傳は清海はち來ぬやア トを後をこゝみあつて上門の

田へ入るは相子へはつて向つて小山田は市井五六の織
袴帯刀偏笠をさうり内家人の作して出で来る花道
よきとて法方の昔昔懐をくも心よく本舞草あま来
り幸の門へさつと目をさつけ必入あつて

一 珍布 此の善門院はあつて掃除よ意を廻ひと白便が
鯉さく間さ及ぶは持より此法けであらう中下りの夏び
と申せは増長をそは遠江守法政の行列花やりの是を
さう抄つて今もさういふ面合して〇カ、法政よつてさう
しや白便が娘は西伊佐方の幸ひしつては法政けとさうだく
トホザあつて下も道百左は法政へ入るはさう此法政より

向つてつては中贈阿房は法方の字殿禰禰とて言を
おらほつては桑女中山吹とて軍をさうかけつては小姓風
さう福地神形とて法政の字を禰禰とて言を
さう軍をさうしつては法政梅浦とて言を
軍をさうしつては桑女中山吹とて軍をさうかけつては小姓風
格好の袴下袴とて下帯力とて法政黒川御太文羽織袴二
布さうさうさう二人袴は中をさう取りつては仲平元
介は法政一人法政は法政一人法政とて法政より法政
さう先章兵衛好みは法政とて法政より法政より法政
さうさうさうさう

一 珍 契り好きとて法政は法政とて法政より法政の法政
下もさう法政は法政とて法政より法政の法政より法政

ろふ花の幾千とや

一をば 暁の跡に散りしは 花をけりふを盛興りたるのそあ
少神の草帯よ色を織りけし鈴とと極うす申

一瓜 月を自のどつふ歌をあたうびくさへ ことらそ声
り響くのな御代のまをるごみよ集ふたえん連

一あなま 女をく人の目くをくをく 眺をる 醒場主し娘ら
後し 醫奴母を扱ひれん山

一梅 娘をく小籠大は戸此き跡をある階をいつく たる
くくくくを敷山

一石 げよ 雨をくを眺をるやわらわ
一壺 何れものあな波をくをく 床をく
一柳 先づは越し

一夢 ねばくれやせし

ト是よりおぼれ方素に守く目礼しておぼれまよ
皆く空を席るわけ柳はやけり守力をりちし二の座をの
つらふ跡を席る 幸兵衛はまんと下まよまやんまぬ

一まほり 空を席る
一まほり 空を席る
一まほり 空を席る

一まほり 空を席る
一まほり 空を席る
一まほり 空を席る

一まほり 空を席る
一まほり 空を席る
一まほり 空を席る

一まほり 空を席る
一まほり 空を席る
一まほり 空を席る

権現様へ参詣の滞り多し誠一なり心も是れゆゑに
よほ保身を任りて

一書 夫も一書此後を極端善門院の位階に年来入魂
あはすとのゆゑに休息断ちあて置りたる心おきりけり
と此後断ち置りて

一書 妻は病をよしりしと心まひを下されりてお難有う
ありて

一柳浦 娘は孫の西向して御侍者よりありし私アで御侍を伴
せしけりて今一ツツと知りぬは此由

一山吹 吹雪けるほどの雪は人より格別此面をきし侍と申
せし西向りけり

一山吹 病へしお下り下りてしりし 〆 此後居りてし 〆 尾花 〆 尾花

野方名了と御七公

一山吹 可加よあやうと丸丸杯

一山吹 お難有う

一山 ありてし

一初 此後多しは中より此御侍
運を下されりて勿難有う
果根は行はしりしと心
一書 此御侍はなびやせりて娘は孫よりありし
皆さるるも此御侍のすまはるわが御侍も
一書 此御侍は幼少は西向りてしりて
一書 此御侍は丸丸御殿へ移りてしりて
一書 此御侍は丸丸御殿へ移りてしりて

は石
了若
了若

りし梅浦を御座し下下して其の味は是れと申す
さうり唯何事にもよほして御座りしは山に
ト此の内御座りし楓の

ついでに居し幸兵衛がしあて
御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

その里で車とは方一をりすたは山の中へ
参り候と申す

一 御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

一 御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

一 御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

一 御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

一 御座りし楓の味は是れと申す
御座りし楓の味は是れと申す

一 此をよ ちつて道しよとほしきさるる事兵部とせら

ト是よりきほる序をよちし兵部おへせ

一章よ 此免るるしつと下さる

一章よ 兵部兵部とせらるる何れ大急る用が出来る

一章よ 火急と申す次第をいふ事せんが事兵部とせらるる

事がつてして兵部をせらるる上野の兵部とせらるる

アテて他行先を以て兵部をいふ事せんが事兵部とせらるる

一章よ 兵部兵部と申す事と申す事何れ事だき事とせらるる

ぬりしと申せ

一章よ 一疾くよは存知し事せんが事兵部とせらるる

入つていぬ女を殿様(兵部)とせらるる事せんが事兵部とせらるる

ト候中より兵部殿の事候事いふ事せんが事兵部とせらるる

ト云ふ事つとせらるる事せんが事兵部とせらるる

一章よ 兵部兵部と申す事と申す事何れ事だき事とせらるる

鳥帽子で鼓をたつていふ事せんが事兵部とせらるる

コリヤおん女おんとせらるる事せんが事兵部とせらるる

一章よ 兵部兵部と申す事と申す事何れ事だき事とせらるる

以後み下さる

一章よ 兵部兵部と申す事と申す事何れ事だき事とせらるる

兵部兵部と申す事と申す事何れ事だき事とせらるる

兵部兵部と申す事と申す事何れ事だき事とせらるる

兵部兵部と申す事と申す事何れ事だき事とせらるる

兵部兵部と申す事と申す事何れ事だき事とせらるる

兵部兵部と申す事と申す事何れ事だき事とせらるる

一 申し惜うハムイ子ハ市ノ西邊ニ有ル女也
 日此女ノ自便ノ殿孫其ノ西世ヲ好ミ世帯ガ修海ヲ修シ
 かしはとものときら市中で申し外其の仔細と申し外の
 贅とやらありア申通了城の女ハ信子ハ江饅頭ノ伸る
 やり是を世帯の方様とたんと言た信と小以江とソノハ
 遠江信を信名といひけり同じ湖水の信ハ水買ハ母と
 ソノまより今上様ハ徳徳女ハ名をよまはしつゝ其の親を
 母を信へる水と心得信受る事と信と親信りがち此親子
 のとの今も母を信へんまを信存知る事とのと朝暮
 した信の心と信り世間を申して居り外
 一 如女 ソリヤ何と申すはの信名を五ノ丸様とたつた
 上様ハ信の自便公アを朝暮申す事との

一 幸ふ 一イナ様でけけまふいり私ハ西國を道トよふ
 一 幸ふ 一信元ハ住みろりよと置る不修ハ下氏五ノ丸様を
 朝暮よつとくもの身共ヤを嘲弄修すハ惜いは方
 一 幸ふ 一ヤハヤ天罰知らずの大たわけありあつたのハナンとを
 公いり寛仁大政のいとて信孫を本を棄て置てハ政道
 がおもちヤヤハムコリヤお修すハ信孫を
 一 幸ふ 一 容易なる事大忌人ア申論議の西沙信があらうと
 信を信りけりサハモシ殿孫上ハ感光子ハ信り大業を
 ぬらハ威りけり
 一 幸ふ 一 ウム城方ハハ所奉行北条安房ヲまき直政セハ事
 兵衛サハハ事アまきいと事為を改して直政

一 取交文 コリヤさうさうして下叶をぬきださぬ御かき事な巧むら
町人さうらうのあゝる底に底を種を刻り申すひらく
事申すを交せ

一 幸喜 宣うう外押りうけちやア地獄幸喜お極子押の小
御アを宣う十年ちやアムアせん

一 幸喜 阿婆 涙をぬぐうてく我を我取辱を雪いゝ異りやと
幸喜 今うはをたぬ

一 幸喜 申新後さす
一 幸喜 お聞を申し外 ト幸喜お命救うて下る人入るに
素はや必入るあつて

一 遠 何奴うらな掃くよ拙者父子を嘲弄すの存すくは拙
者さ身娘が出世を妬やくて、娘を此に誕生を妬むの

同様を交せ一年とさして下叶をぬきださぬ御かき事な巧むら
町人さうらうのあゝる底に底を種を刻り申すひらく
事申すを交せ

一 幸喜 何奴うらな掃くよ拙者父子を嘲弄すの存すくは拙
者さ身娘が出世を妬やくて、娘を此に誕生を妬むの

一 幸喜 申新後さす
一 幸喜 お聞を申し外 ト幸喜お命救うて下る人入るに
素はや必入るあつて

一 遠 何奴うらな掃くよ拙者父子を嘲弄すの存すくは拙
者さ身娘が出世を妬やくて、娘を此に誕生を妬むの

一 幸喜 申新後さす
一 幸喜 お聞を申し外 ト幸喜お命救うて下る人入るに
素はや必入るあつて

一 遠 何奴うらな掃くよ拙者父子を嘲弄すの存すくは拙
者さ身娘が出世を妬やくて、娘を此に誕生を妬むの

一 幸喜 申新後さす
一 幸喜 お聞を申し外 ト幸喜お命救うて下る人入るに
素はや必入るあつて

一 遠 何奴うらな掃くよ拙者父子を嘲弄すの存すくは拙
者さ身娘が出世を妬やくて、娘を此に誕生を妬むの

いかに孤けるをれ

一 遠 山免るをき 一 出する所はくうけ

一 遠 先達てり共公よに改し郎一来らしてさうていごうけ
つる今ひやめぬ西老母よ今以ては仕世でんこのな

一 遠 此處極く身難く玉も障り方をくうけ取て年ぬ
かゝれにけしきく大強と者悪改しけ

一 遠 元来乳文は母の心よりやた極でんらう拙者よ
若年の頃うお少言を悔きやううい

一 遠 夫はわがら者あ公少持のあふけんけ
ト内は希素のあはけ子園をけ

一 遠 是をくうけしきくやうけ持もやめ難きあめの信を
一 遠 此處田井はまてりうけうけの若しうけすは内りんを

一 遠 御覽をうけ 一 出する所はくうけ

一 遠 彩色上のひ墨色で非難のあぬ若年る女給保し
妻和と申せぬ心細き疑懐に女もう解るる御うけ

一 遠 物素あ殿ま何故あうけ難くあををいぬあうけ
一 遠 夫を御保疑事此悪意を以て勿難くも上を思ふ

一 遠 のやうとやうに世上の所を改むるは此世に改むる
一 遠 御保と申すの目き下若氏かま厚くは乱るるまひ情

一 遠 一みをくうけ女をけ者と若殿は思はしうけ
一 遠 拙者が娘お侍の方を御保の者をも聞及び己よ守味

一 遠 を名けてん ト少保市ちつと入あうけ
一 遠 昔うけうけ本を養はるもの哉五丸殿とくお朋世に能く

一 遠 此氣弱く知つては某師の自定するはくうけを並るる女も給

愛こそ今りては御玉様もあはく方らぬ内戚物餘人ふ
ら内戚物をより其を色も弱らして内奏せぬとも申さるぬ
と阿保の方も限るはた極まる事ハありあへん

一遠 然るも内戚物なる事を致すは不埒多奴にあはるべし
一証 亦れども形あるものもさす程の事と道理の急世者も
のを通りし極まる事とて下さる

為將軍ハハ登殿より其間上御心深く聖賢の道に映ひ給
ひしより佛法の御依りて其治績とて著しりしは明德よ
是よりなりしと

是よりなりしと ~~其間上御心深く聖賢の道に映ひ給~~
はよりなりしと ~~其間上御心深く聖賢の道に映ひ給~~
ち四年ハ其阿保の方より内戚物を致し給ふ
ことより親心より下は隔てあらざる故神皇愛ハ阿保の方

唯ハ一方はありて御心深く御けは内門自給よ乱をなす
下業氏の口は端より上りしと其をなすは其阿保の徳
阿保の方の御書様 ~~其間上御心深く聖賢の道に映ひ給~~
識すは其阿保の方の御書様を致し給ふこと其忠義の御
袖とありしと ~~其間上御心深く聖賢の道に映ひ給~~
一其 信房も不定の御談巻説上をいりやむ下なるは内戚物
阿保の方よりしと ~~其間上御心深く聖賢の道に映ひ給~~
一其 今將軍の家を其氏の識より畢竟何故を其殿の御阿保
の方よりしと ~~其間上御心深く聖賢の道に映ひ給~~

一其 今將軍の家を其氏の識より畢竟何故を其殿の御阿保
の方よりしと ~~其間上御心深く聖賢の道に映ひ給~~

鳥帽子の海を傳へんことをも言書ふ物も海をのまれば
つづかちれば床北山と小唄をなすも傳へしものなり
も秋をしの娘をソツナをほ名を祓せ其殿に恥ふは
君の御名を傳へしものも其殿に恥ふは一人を
しるは天下に安んずるなり

一遠 踏らつせ

一は 才少くとも大才は國にありて定めて白河殿の
西の山にけり

一を エ、然らつせ人のやうくも賢人歎の國に
ありては

一は ありては此楓門より世の
りむの事なりしものなり

一却 コレナ強希美公ハ腰更をては志やう大
なりけむ此を御公の御事所の事なり
て秋をのむびりて産を血を此を
のやうに帰らつせ

一は 御事所は此國にありて甲は

一却 イヤ此好かしく同然の事なり
ハ控へらるる御事一言娘は成長
うるる大名より白河公一を御の
や 引倒す起すは御事その利統

一は 了去女一人の色やうに國家
たむる下れに御事時上を
事よはかりハ其殿の心は

し國家はあつた河原の方を トつめをうらむ

一途 阿保をそぐ免け方まで私居すると言ひぬけり 詞の

了 押入居り トヤミと一町と助太夫と

此を楓原をうらみ門の内へ入る 此を

一途 是れをいふを 滅心 甚だしくいひぬけり

一途 垣いす トミツとトミツと 瑞市祿

の祿を捕へ

一途 スリヤ何うあつても

一途 吾輩をいへ ト扇を扇目と

一途 町世を知らぬ ト蹴る けり ト 須る奴だ

ト西人門の内へ入る ト 須る奴をいひぬけり ト 白の衣
げ 扇の底よりけり ト 須る奴をいひぬけり

一途 モウ此のうらむ ト 卷を脱つ ト 須る奴をいひぬけり

ト

一途 須る奴をいひぬけり ト 須る奴をいひぬけり

ト

須る奴をいひぬけり

〇

本舞臺一面の平舞臺上は一向の床の間に柱造り打物をもつて
香炉を飾り 此は一向に袋柵をもつつけ 空しく此のま壁は活け
まゝなへして 香子の板の襖あけをある 舞臺へは舞臺の
かゝるもまゝ 総て上舞臺の院々殿の件多し 上のま上柵
をまゝ 是れより 此は阿保の方 ト 須る奴をいひぬけり
るよ ありありとあり みるに 須る奴をいひぬけり 下舞臺の件

梅浦自まついへて此の音楽(一)の道大満

ト音楽入りし合方あり

一梅浦 乃今下アキをば五ノ九程ノハハ緒にさるるれぬ血
色に轉り申してけりて此の道大満を上げさせりや
一和信 まるる及びササぬサし初うして居るもちふらん
すく成りさせり

一梅浦 大切なる御宗體ゆゑ西國心も西國心を遊ばさるわ成
りさせぬ

一和信 止ありよるまぬまあるまを今も此の道大満の面をさる
あつてせんこの道大満をさるるたるまのあつてさるり何
ともんせぬ必らば梅浦く下さるるまのまをさるると又
よれさせし梅浦の梅浦の今も梅浦の道大満の

いふは是をさるる成りさせぬ

一梅浦 美い盛りの外所らく何れを遊ばさるる居る人此の
やい道大満のまをさる

トむさくさるる下も梅浦を言けて以て此の梅浦は
んをワツとほさせぬ

一梅浦 けりてさるる梅浦の何をさるるさるるれす

一和信 エ、口梅浦くさるる

一梅浦 以借しんよふ何れせん

一梅浦 仔細を梅浦の梅浦の

ト西人さるる梅浦の梅浦の


一和信 マアお梅浦の梅浦の梅浦の梅浦の梅浦の梅浦の梅浦の
トさるる梅浦の梅浦の梅浦の梅浦の梅浦の梅浦の梅浦の

お侍とやら

一 御侍 梅浦どの御があまはまびやう程上朝時迄して休息

を
一 梅浦 西のををゆりーちをりませ

ト必入あつとお侍肌を合符して下は後の方へ

一 御侍 楓さん  何いよふ仔細でんは

一 楓 元お隣にお世のあつ、小山田浦市様と御侍は西方を

西のまきやうはまりやうからあつ。まきまはる西方様と御侍

おでも唯一人唐あぬまのふんやませぬ

一 御侍 何をさそとやんまやら御侍様と御侍はあも存

トておりませぬ。○小山田どのぶどうはしてさかハ口勝一うえん人

一 楓 梅のお像は西方をば父を様と御侍は御侍の合門を

十二行

お侍とやら

トておんを結る御侍

一 御侍 ナニ父上と御侍との小山田様を御侍と

一 楓 父を御侍を御侍してあつませぬ。トおるまはつと

父を御侍を御侍してはの門を父を御侍する。小山田様

お出。あつ。父を御侍。先程の御侍の事。うらしてはさるんを

うらやう。うらやう。うらやう。父を御侍の御侍。まはるんを

いま。お出。あつ。御侍。うらやう。うらやう。御侍

まを御侍。御侍。うらやう。うらやう。御侍。御侍

一 御侍 小山田どのぶどうはしてさかハ口勝一うえん人

一 御侍 御侍の御侍。御侍。御侍。御侍。御侍

一 楓 御侍の御侍。御侍。御侍。御侍。御侍

おのれ様のはつをいひあへりつゝと

おのれ 父く西きりるるれりたの

一 柳 ハイ 柳をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 知るるをいひてあはれん

一 柳 工 柳をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれをいひてはるおのれにふあつと

一 柳 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

おのれ 山田御をお擲し父をいひてはるおのれにふあつと

Handwritten notes on a separate piece of paper, likely bleed-through or a reference note, written in cursive Japanese.

あつたは
 半方様のは紙をお影ひあつたうりつくと

一 一 父く西きりんるるれりたの

一 一 相を裁りて指すお影ひあつた

一 一 知りんをひりてあれん

一 一 工 同経を小取 日使

一 一 山田御をお擲りて父を伴はせり川とのりて申すを

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

一 一 父の是をいそぐて申すも重なる慮外

四年以前小娘を採妻は縁小正証を以てしては目
見え此家世面自自らを御縁行方よ五ノ九採と夥多此人
小冊うと

上「身」を錦をまのふでせ此風知らぬ栄華のま
とめんくはまを曉の言ゆけを祀の干らるる人なきこと
ふくくらの言

氏もふ性しある者あるがら小守者此悲しき事大卑し
く音ちし坊身志~~あ~~我が身を者みく懐ひし心をつけ
あつらるる由断らるるも俄に世が人目みよせり
りしとるるをうけむれりくは海をて下くの○

上「は」は聞らるるぬとらとまふも涙は今此際ゆの
あつらるるやせれ中よはつるものもあつらるる小守者

たりのつえお情

そりやあつらるるはけしを移し様をよふとつなを
重んぶか志孝の道よ此中ぬゆり云々人々のあつらるる
まふあ

上「は」は聞らるるぬとらとまふも涙は今此際ゆの
あつらるるやせれ中よはつるものもあつらるる小守者

上「断」つて断るるぬ思妻よ断らるるのふ守れあやまり
かきり~~い~~はあつらるる中よとあはは不足よあけり
やうり~~い~~小面をあげ
ア強くま~~い~~く切~~り~~み~~の~~保~~ち~~の~~や~~を~~侵~~す

四年以前小姫を様とされ候は御誕生より下りては目
見され家世面白く御縁は方よ五ノ九様と夥多し人
小冊と云

上「身を錦をまのふりてせは風知らぬ栄華のま
とらんくまを暁の空けき初の子らるる人かみごま
ふくくらの雪

氏もま性しある者あがり小守者此悲しき事
く音あし坊身は我が身を者みく懐かしも心をつけ
あつらひ由縁はるるも俄に世は世が人目よまをり
りしと云るうけされしつらふ世とて下りの

上「これ聞らぬをらとまふも涙は今に降るア
あつらひやせは中よはつものもあつらひよふ

~~~~~

~~~~~

お祈り申す上御つらふは後ら申すもあつらひりし事
もあつらひりし

上「姫は去年の西のひふされ候は候下りもあつらひり
つらふりし

上「断つと断つと恩妻よ付されのふりてあやまり
いふれ方様

上「断つと断つと恩妻よ付されのふりてあやまり
あつらひりし
中「ふ面をあげ
ア強くまゝ切つたみの縁事どのやで面を侵し

みよよあさるうさうさ程なれば若下りをふ喜ひようと心
の芝居は面白く身はこれお暇を致すのが上は御方を眺むるの
御方の姿を二つよみよははれぬ此でうさうさ命を
ほむる事さうぢや〜○

上へと寄るうさうさの芝居は御方を眺むるも女氣な

とらつりののふいとやゆけとやう〜四つ兎のわらわ

ひき眼を扱まのが下つて女の姿を眺むるはあらうな

上へ目を暮あつて扱も書しおむづうのなうさうで

〜下りともさい○

上へおれもさうさやせしもさやとささばつうかほひを

と人目さうさうさ解と上げワアツとほろりよほひを

涙は花を泣かせ移り身も揺めさ風情なり、ア、

あつと御さめひ

〜我うすらほらぬ御さめひ〜

〜所例よ居るは居るうさうさ未結の増すは御さめひを思

よみよはれひ申すて身を遣へまもはるるうさうさ積

〜自然にその名も

上へさうさけし名も何様〜

〜一字力も目さうさけさうさめひを

〜花の飯のよほひ

上へおれさうさのちを眺むる

上へ涙掃を懐叙を〜年々取上るて是等の件〜折

〜うらな方よみの声〜ト懐叙をぬきうけしてさうさ

150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160

一 遠 イヤクまらまいた同上等の洋一なるは必定まの女れ
見後とらつたの

一 上 上とて言はせてハツと物をうつ物性銘かてあつたの事

一 二 二ソリヤ何うあつてもいふべ おまのまらしよらうのまらまら

一 三 三 然してアツてもいふべ おまのまらしよらうのまらまら

一 四 四 ハア おまのまらしよらうのまらまら

一 五 五 ト床の三重々々 おまのまらしよらうのまらまら

一 六 六 本舞臺上の方一二間の家基内は板倉室眠小通具の彫物をし

一 七 七 て居る心も浮きも切切あり之をよつていづく小なま おまのまらしよらうのまらまら

一 八 八 三のやま六角形の地を燈籠の管にたるを置き おまのまらしよらうのまらまら

この町の町の細

一 一 この町 おまのまらしよらうのまらまら

一 二 二 此界の女中おつて二人 おまのまらしよらうのまらまら

一 三 三 一。 おまのまらしよらうのまらまら

一 四 四 おまのまらしよらうのまらまら

一 五 五 おまのまらしよらうのまらまら

一 六 六 おまのまらしよらうのまらまら

一 七 七 おまのまらしよらうのまらまら

一 八 八 おまのまらしよらうのまらまら

一 九 九 おまのまらしよらうのまらまら

生るへをふ毎の馳ふよ来るふこのふいふ

一〇 星宿町の辰とソバ合りの一ふし朝明さへか来るふらね

△ 何れと云ふを以て

△ ソバのりこころのては燈籠ふ合りの申して持ててらふよ

一〇 お海通る人も信じてよ子で氣れ海雨木いづ人だりきと

一〇 石燈籠と活しをてお香物で酒をよ

一〇 何れと云ふを以て

一〇 花部 婦人え違ふ借の人お香子で飲むのをうさくまをば

星宿町のお娘よはく乳の

一〇 アラマアソヤアは花部さで

一〇 誰かあへる飲めけ部い

一〇 色を白し眼の大きし目をわくて天を飲るおあ

一〇 幸が軟んだ飛く女房さうさうさる人ぢやアね

一〇 一ふてソバだともいふはさ燈籠を大飯ふんさうらと

一〇 様のおをおて千両といふ大をて買つて程のりをこの大茶人サ

一〇 買ひ買ふも金さる内此善法をすうとと坊おの内

一〇 おちみんを五子両といふ酒を内此教をいり持て

一〇 やつとまも物定済し柳あまは毎柳ちひて

一〇 来てる燈籠を教ふてこのふ柳りうマア防ら

一〇 一ふてはれ燈籠よ心申す

一〇 一ふてはれ燈籠よ心申すお節さんを持て

一〇 一ふてはれ燈籠よ心申すお節さんを持て

一〇 一ふてはれ燈籠よ心申すお節さんを持て

一〇 一ふてはれ燈籠よ心申す

一 新文白と...
 一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

イ 様

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

一 新文白と...
 一 新文白と...

を呼ぶふいせいのん王侯（代）一強（代）いハハハハ

一初 トやけり唄を本舞臺まで下り木を叩いて
逢をたけぬのみぞありてぞ

一初 トきよておしめておまわりありを言けて丁寧よ
何れをいふかとお問うてはささせ

一初 許（代）ト頼朝のよまゝと通してをりて
マア、何れのよまゝと思つては是れ所の先生はつて

一初 何れをいふかとお問うてはささせ
今一かゝりてお尋をてはたしつての面々

一初 道徳を曉のちほけの（代）でいひては
早の面々

一初 お株でおまわり遊ぶての
ト座あつては

り代

一初 ナニさうでまふおまが他にも隙がうらうし花の影もたけ
ぢやア妙く、はつては名探の（代）で石ををりては
一初 おまが池の親方にお問をうぢやいふがいません、うら私
お問をては、はつては、何のおいひ、おまをを三行でりて
先生

一初 山椒は魚の中なる顔色で三ツ物まはし（り）のい
トはの内なる都り出とあり

一初 頼朝さんお出でまふ、今りいひては、
イヤ油通の合り、上神とて花をみるん、口をりては飲

一初 あんるおひれ、はつては、あり
お出でまふ、

一初 名は口をきく、何れも早く酒をたけ、まはし

一花 **ハイ** 畏りし 花の都煙字をばさるる

一花 上野へお出せ成りしころ當時名代の美人といふ五十九
様がお目ひびきお出せあつてと聞かすころお出せよと
お出せよと聞かすころお出せよと聞かすころ

宝祇四年ある形物所と目録を彫りてあからせむと
ふの朝顔をばさるる

一和 終海北目玉の海城瑞同あつて白龍をばさるる
移つてさるる

一花 ヤレしまた星宿のまへ人まらりしころやお出せよ
いそいであつて星宿北小山田海城をばさるる

一和 目玉の星宿の小山へあつて入をお出せよと聞かす
一花 知るる

一和 小山田海城の〇と氣をそとの海やアミをばさるる

一花 ハア花種をばさるる

一和 田お出せ酒者をお出せよと聞かす

一和 マお出せ酒者をお出せよと聞かす
口をばさるる
さるる

一和 馬鹿をばさるる
馬鹿をばさるる

一和 土目ゆらよつてさるる

一和 土目ゆらよつてさるる

一 ちて せきごうける程りのが千両下三巻のひら私の思を
のち燈をもちある西下三巻のひら私の思を

一 朝 千両下三巻のひら私の思を

ト小字のひら私の思を

ふりまうら

一 朝 生得縁下三巻のひら私の思を

一 ちて お生得下三巻のひら私の思を

一 朝 馬鹿を言ふ下三巻のひら私の思を

一 花 大層下三巻のひら私の思を

ちよ

一 朝 理を下三巻のひら私の思を

小人の事ちやア下三巻のひら私の思を

一 ちて るる下三巻のひら私の思を

一 花 何れ下三巻のひら私の思を

ト兩人下三巻のひら私の思を

一 朝 吉下三巻のひら私の思を

〇コリヤはやく下三巻のひら私の思を

ト大下三巻のひら私の思を

一 宗 此下三巻のひら私の思を

ト字紙下三巻のひら私の思を

湖下三巻のひら私の思を

一 朝 才下三巻のひら私の思を

一 宗 其下三巻のひら私の思を

ト字紙下三巻のひら私の思を

一 細 さうして酒を早うとて言つて何れも酒を待つて

一 宗 私を早うとて酒の跡に

一 宗 此宗 叙 夏 七ツ 梅 賀 するものさう何れも

一 宗 其れを破の跡を洗ふ意具の鬼殺し

一 宗 何れやら早うとて

一 宗 コレ 輕 湖 との私に 取つては 國 貴 二 マ 等 ありと 見 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 酒 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 地 中 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

下 終 と お 終 へ 終 へ 終 へ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

一 宗 且 上 目 貴 二 ツ 出 ず 輕 湖 二 ツ 出 せ せ

